市史通信

【目次】
●一九三〇年前後の地域振興バザー
●横浜現代史人物伝①鶴見の医師・渡辺歌郎
●写真で見る昭和の横浜④横浜市長公舎ー「都市外交」の拠点ー
●横浜のダンスホール
●展示会・講演会アンケートより
●所蔵資料紹介
●市史資料室たより

昭和初期のバザーの出店　開港記念バザーだと思われる　夜光昭三郎家資料

第10号
【発行日】2011年3月31日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisi@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/housei/sisi/
（4月1日より）

一九三〇年前後の地域振興バザー

横浜市では、慈善的なバザーではないものとしては、一九二〇年に始まった開港記念バザーが著名である。これは多数の商店が出店するバザーであり、太平洋戦争を挟んだ一一年間を除くと現在まで連綿と継続され、開港記念イベントの主要な存在である（『祝賀横浜開港記念バザー　第五〇回』・『横浜市史稿』風俗編）。

このような全市的なバザーだけでなく、地域振興のバザーが昭和初期にも行われていた。きっかけとしては、震災復興や昭和天皇の即位を記念して始められ（「御大礼記念」）、これを見た他の地域でも開催するようになった。一九三一年六月には、「バザー流行〔略〕保土ヶ谷、鶴見、野毛山と初夏の浜にオンパレード」との見出しで、既に終了した神奈川・掃部山・開港記念、これからの保土ヶ谷・鶴見・野毛山の各バザーがあると伝えている（横貿六・六）。

掃部山バザー

掃部山公園を会場に行われるバザーは、一九二八（昭和三）年初め頃から計画がたてられ、五月には、七月一日～四日の期日で地元有志の発案で計画され、第一回協議会において委員長石原菊太郎、委員一〇名を決める筈と報じられた（横貿五・一二）。石原は、戸部町で紙類や茶類を販売、また諸会社にかかわる有力者で、政友会の市議であった。なお、開港記念バザーは、例年は七月一日から行われていたが、同年から記念日が六月二日に変更となったためにバザーの日程も移動していた。この掃部山におけるバザーは、もとの開港記念日から開催の予定であった。主催は「御大礼記念に本市の急務とする商工業振興に資する目的で誕生した掃部山バザー協会」で、会場内各所にぼんぼりを設置し、井伊像前広場には大余興場を設置し芸妓の手踊り・茶番・音曲などを公開、会場外の岩亀横丁・戸部の公園入口・紅葉坂の三箇所に大アーチの設置、特設店の外、一般売店は一四〇小間（一小間二五円）で公園広場と県庁官舎・紅葉坂口まで設置するなどの計画であった（横貿六・二〇）。その後、準備が進み、銅像前広場外一箇所の広場に設置される特設店が二〇、園内通路、県庁官舎・裁判所官舎付近に設置される普通売店は一三三店ほどで、二日には「大仮装会」を行う予定と伝えている（横貿六・二六）。また、余興では、手品奇術や舞踊・手踊りなどと共に、三日夜には松竹の女優柳咲子・東栄子・田中絹代等の挨拶などが予定されており、「開港バザーに劣らぬ／余興で人気を呼ぶ」との目論見であった（横貿六・七、二八）。

バザー初日の七月一日は幸い梅雨晴れとなり、九時から銅像前広場におい

て報告式、また、飛行機によるバザー宣伝ビラの散布が予定された（横貿、毎朝七・一）。会場は「三方入口から場内へと雪崩れ込む人の波退つ引きならぬ程で各商店共に大繁盛であった」、「飾燈に火が入つての壮観なるこの夜景に一入の人出であつた」と報じられている（横貿七・二）。二日目は、夜七時から各店選出の仮装行列が掃部山公園・雪見橋停留所・紅葉坂・伊勢町を巡り、三日目は午後六時三〇分からの松竹蒲田の女優挨拶に「身動きも出来ない見物人の山を作った」という（毎朝七・三、四）。仮装行列は三三組あり、市政記者団が審査し、ある少年の「掃部頭」が三等となった。その他の余興も盛況で、事故もあったが概ね成功であったようである。

翌二九年も五月頃から準備が始まり、余興場が三箇所となり（銅像前・児童遊園地・大谷家地所内）、仮装行列の審査を松竹の女優に依嘱するなど、規模を拡大させていた（横貿五・二六、六・一五）。また、掃部頭銅像を摸した人形を乗せた花自動車を六月二九日、三〇日に市内各所に走らせて宣伝を行った（予定、横貿六・二九）。同年は雨に降られたが延長せずに行ったようである。

三〇年からは、伊勢山皇大神宮の例祭が行われる、五月一五日近辺に行われるようになった。同年には「マネキンガール塔　児童遊園地内中央に塔を建て適時マネキンガール登場、出店者又は商品の宣伝広告をなさしむ」などの新しい試みもあった（横貿四・二二）。

磯子バザー

磯子では、一九二五年から八月に納涼花火大会を行っていた。二六年からは市電気局が主催していた（伊東洋『横浜花火年表』、二〇〇六年）。二八年には、この花火大会に合わせてバザーが計画された。場所は磯子区役所裏の埋立地で、花火と横浜水族館開館に合わせて、八月五日から七日が予定された（横貿七・一二）。同記事では、水族館開館に合わせて磯子の発展を図る催しをと有志により協議し、バザー開催に経験が深い近沢定吉磯子区長を中心に準備を進めることとなったと報じている。近沢は、一八八六年生まれ、三二歳で横浜市に技師として採用される前は商店に勤めていたという、また、市商工課長も勤めた（『浜・海・道』）。七月二〇日までの出店申込みは一七〇軒となり、その中で水産会の売店はかなり大がかりなものらしいと報じられた（毎朝七・二一）。ところが、花火の日程が八月八日に決まり、水族館の開館日も水の濁りから八日になると、バザーも八日～一〇日に変更され（横貿七・二九）、六日には、神奈川県測候所長から天候の意見を聴いた電気局が一一日に延期と決め、バザーと水族館では一〇日に繰り上げるように要望を出したが、結局、一一日に変更することに決めた。しかし、初日の一一日は、「泣き模様が本雨になつて朝からのシクシク雨」の天候で「村雨に寂しいバザー」（毎朝八・一二）と報じられたように、雨模様で客も少なかったようである。しかし、夜の花火は一二～三万人の人出だったという。二日目は晴れたので盛況だったようである（横貿八・一三）。

翌二九年には花火は行われたが、バザーは行われず、三〇年には花火は無く、バザーは行われたようである（『横浜花火年表』・『横浜市史稿』風俗編）。

拝啓益々御清穆の段奉慶賀候陸者本会御大典記念事業として横浜水族館を建設致し本月八日午前九時半別紙開館式並書の通開館式挙行致すことゝ相成候に就いては御繁忙中甚だ恐縮に候へ共御来駕の栄を賜り度此段御案内申上候
拝　具
昭和三年八月
横浜市水産会長　有吉忠一

横浜水族館開館式案内状　1928年
（安室吉弥家資料No.400に貼付）

保土ヶ谷バザー

市史稿では、鶴見・保土ヶ谷両区では一九三〇年からバザーを開催したとある。保土ヶ谷区の場合、松居久吉区長が天王町の表門振興会・川岸保盛会・共栄会・昌栄会の各商業団体にバザー協会設立を呼びかけて実現したもので、松居区長は市の勧業課長を勤めた人物であった（横貿五・二九）。

しかし、これ以前に商業団体によるバザーが行われていた。二八年には、紡績表門振興会の主催により、七月一日～五日に行われた（横貿六・二六、七・三）。二九年には、振興会・昌栄会連合主催で七月一日～五日で行われた（雨で七日まで延長、横貿七・二、六）。

三〇年のバザーも、同様の日程で行われている。保土ヶ谷のバザーの特徴は、開港記念バザー等と異なり、主に「居付きの商人が自己の店舗前へ出品する」もので、地元の商店約二〇〇店、全市から一〇〇店を募集する予定となっていた（横貿六・一九、二六）。また、他のバザー同様に余興も「盛り沢山」にあり、同年の掃部山同様にマネキンガールによるダンスや劇、各店を廻っての販売援助などがあった（横貿六・二八）。初日には、「午後にはすつかり店並も整つて客足も激増、夜に入つては雑踏の巷となり」という盛況であった（横貿七・二）。二日には「販売競技会」という名で、店頭の装飾、照明、陳列、値札、説明札、宣伝、サービス等の審査が行われた（横貿六・二六、七・三）。褒賞授与式の記事では、従来は店頭装飾の審査は行われていたが、装飾・商品陳列・サービス等を詳細に審査したことがなかったので興味をもって迎えられたとしている。

翌年も最初に書いたように、横浜の主要なバザーとしてあげられている。

神奈川バザー

一九三〇年四月一〇日、神奈川方面の復興を祝する「復興復旧事業完成祝賀会」（復興祭）が計画された。同時に

神奈川会館・神奈川公園の開館・開園の両式も予定された。これに合わせて、港北地方の商工業を振興させようとの有志により神奈川バザー協会が設立され、四月一〇日～一四日にバザーを計画した（横貿三・二七）。会場は、開園する神奈川公園で、小間売店約一五〇、特設店一五であった。バザー協会総務柳下林之助は、「バザーはローズ物をはかす市場だと云ふ之れ迄の悪評に鑑みよい品を安く売る主義を尊重し」出店者を選考、また、不満があったら投書が出来るように鉛筆を付けた投書箱を五箇所に設置すると語っている（横貿四・一〇）。初日は、午前九時から開店し、一〇時から開館・開園式が招待約一〇〇〇人、地元千数百人の列席で挙行、昼過ぎから青木町・神奈川町連合会主催の園遊会、午後二時から一般にも開放した（横貿四・一一）。また、他のバザーと同様に神奈川芸妓連の踊りなどの余興も用意され、三箇所の会場で行われた（翌三一年では公園内・中央市場通・区役所横）。また、店頭装飾の審査などもあった。

第三回復興記念神奈川バザーのビラ　1932年
（〔第3回復興記念神奈川バザー〕関係書類』、市中央図書館所蔵、資料番号0002995204）

翌三一年からは、三〇年九月に設立された神奈川経済協会が主催して、規模を拡大すると報じられた（横貿三・八）。同協会は、「地方経済の振興発展並に会員相互の協調親睦を図る」目的で組織され、三四年では区長が会長、県議・市議が副会長等の役員を占め、総務・商工・農芸の三部を持つ組織であった（『昭和九年四月　神奈川区勢要覧』）。余興では、定番の芸妓手踊り・レビュー・奇術等のほかに、「美人買物競走」が行われた。二日目の一一日に行われた競走は、「神奈川芸妓」二人一組、計一二組が指定の三三店を巡って買い物をするもので、会館を一時四〇分にスタートして一位は二時一六分に演芸場（余興場）に到着した（横貿四・一二）。また、坂安商店が持ち込んだ「ロボット」が人気を呼んだ（横貿四・九、一〇）。

翌三二年は、五月一日～五日で行われた。これは「季節尚早ク出店者ニ於テ開期延期ヲ希望スルモノ多キ為」であった（「第三回復興記念神奈川バザー事業成績」）。出店数は「概要」の予定数では一二〇小間であったが、実際は不況により申込みが少なく、一小間につき五円の補助（五円引き）をして勧誘に努めたが半分の六一～二小間で、売上げも「連日好天気ニ恵マレ初日ヨリ夥シキ人出ヲ呼ヒタルモ財界不況ノ為カ売店ノ売上高前年ニ比シ稍面白カラサリシカ如シ」という状況であった。余興も前年と同様にいろいろと行われた。その中で「美人買物競走」が、今度は選手を神奈川区内のカフェ・バーの「女給」にして行われた。一七人ずつ二回行われ、ルールはコースに沿って各町参加店二軒づつ、合計二〇点の買い物をして順位を競うものであった（「美人買物競争規約」）。

その他のバザー

先に触れた鶴見は、市史稿記載の一九三〇年は確認できない。翌三一年三月「バザーを語る鶴見商人の意気／今年は流さずに実現させる」との記事があり、ある商業団体幹部は、「一体バザーは商品の宣伝を目的としたものであるから多少の犠牲は已むを得ない、殊に鶴見町の物価は高い高いと云はれて居る際であるからバザーを利用して鶴見商人はよい品を安く売ると云ふ事実を一般に知らしめねばならぬ」と語っている（横貿三・一一）。六月には潮田町の有力者三人が発起人となり、鶴見区実業団体協和会後援で潮田町潮見橋近く総持寺社会館前広場において「鶴見発展大バザー」を七月一日～五日に開催することになったと報じられた（横貿六・一七）。他のバザー同様に小間出店や余興が予定されていた。翌年はこの潮田方面のバザーは中止となり、一方で鶴見下町商栄会が主催、鶴見区商業団体連合会が後援、六月一日～五日の期日で旧国道本山前通を中心に行われた。余興なども他のバザーと同様にあったが、雨が降った日が多く八日まで延長になった（横貿五・二八他）。

三一年には、野毛山でもバザーが始まっている。野毛山バザー協会（委員長森田伊助）主催、期間は七月八日～一二日、野毛山公園内の大通りの市長公舎前から水道公園脇・老松校通りなどに一二〇余の出店・二五の特設店、市長公舎横と老松小横に余興場を作る予定であった（横貿六・二四）。同年は雨のため一六日まで延長されている。

また、戸塚町でも始まっている。

各バザーは、梅雨期にかかるものがあり雨に祟られることが多かったが、多くの人を集めることには成功している。そのためには、出店というバザー本体だけでなく、各地域の「芸妓」や「女給」を動員したり、「マネキンガール」や松竹の女優を招いたりして余興に力を入れている。また、花火もほとんどのバザーで行われている（『横浜花火年表』）。一～二回で終わってしまったバザーもあるが、いくつかは地域の年中行事として定着していった。

（百瀬敏夫）